



今から四〇〇年ほど前の江戸時代の話である。武蔵国（現在の埼玉県、東京都、神奈川県の一部）を中心に、河川の改修工事をして新田開発に力を注いだ伊奈氏という一族がいた。

三代目・忠克もまた祖父や父の仕事をつぎ、*関東郡代として関東地方を治めており、特に、河川の改修工事や新田開発に努めてきた。忠克は、

（わたしも、祖父や父のようにみんなのために役に立ちたい。）と、すぐれた土木技術をもって、米作りには欠かせない用水の整備を進めていく伊奈一族の仕事をほこらしく思っていた。

当時、幸手の村々は、大雨がふるたびにいつも洪水になやまされていた。その一方、雨が少ないと田の水が不足して米作りができなかった。用水が十分に整備されていなかったからである。

「今年も米が作れなかった。」

「水さえあれば、田畑も開こんでできるのだが……。」

忠克は、こうした村人たちの様子を見て、

（よし、何としてでも、村の人たちの役に立ちたい。いっしょに土地を豊かにしてみせる。）

と用水の整備を決意した。

学習した日

月 日



忠克は利根川から水を取り入れ、大量の水をため、その水を用水路から確実に田に送ろうとさっそく計画を立てた。琵琶溜井開発のはじまりである。計画をもとに、村人たちは焼けるような夏の日も、身がこおるような冬の日も、朝から晩まで水路をほる作業を続けた。

しかし、水をせきとめることは簡単なことではない。沼地でどろが多いために土が流されやすく、何度も何度も修復をくり返さなければならなかった。

(水がなかなかとめられないぞ。うむむ……。)

その後も大雨がふると洪水が発生し、そのたびに工事を中断しなければならなかった。また、水の流れが計画したとおりに流れず、何度も何度も工事をやり直さなければならなかった。忠克は多くの村人たちに計画の見直しの同意や作業を続けるための協力をさらによびかけた。みんなで力を合わせてやれば必ず成功する、そうすれば新田が開発され生活がうるおうということを、忠克は村人たちに説得してまわったが、村人の中には、「用水はいつでもできるんだ。もうへとへとだよ。」「うちの田には、いつになったら水が来るのか。」と言って工事への不満をもらす者も出はじめた。

それでも、忠克はあきらめなかった。
(今までにない難しい工事だ。だが、なんとしても村の人たちのためにやりとげなければ……。)

忠克は、代々受けつがれてきた技術はもちろんのこと、水害から人々を守り、さらに豊かな土地にしようと労をおしまなかつ



現在の琵琶溜井の様子

た。そんな忠克の思いにつき動かされ、村人たちも工事を投げ出すことなく、琵琶溜井の開発に力をつくすようになった。

万治三年（一六六〇年）、忠克の熱い思いと村人たちの努力により、琵琶溜井はようやく完成した。

「これで私たちの田もうるおいます。」

「すみずみまで水が流れるようになって、さらに米が作れるようになるぞ。」

この琵琶溜井が開発されたことで、幸手の村々の水田はうるおい、米の生産量も増え、村人たちは大いに喜んだ。幸手には新たな田畑や村々が生まれた。

忠克は、祖父の時代から続いていた利根川の流れを変える工事や川沿いに堤防を作る工事に力を注いだり、父の事業を受け継ぎ利根川を整備して、船が行き来できるようにしたりする工事もした。その業績がたたえられ、埼玉県の伊奈町や茨城県の伊奈町（現在のつくばみらい市）は、いずれも伊奈氏が地名の由来となった。江戸時代初期から忠克が整備した琵琶溜井の水は、幸手だけではなく他の市や町で今でも利用されている。村人たちや後の世代のために働いたという忠克の思いと人々の協力する姿は、今も生きています。

* 関東郡代：江戸幕府の職名。関東地方の幕府領を治める地方

官。伊奈氏が代々受けついだ。

あなたが地域や社会のためにできることを書いてみましょう。